

小川プロダクション作品  
デジタル復元プロジェクト第2弾

# 『パルチザン前史』（土本典昭監督） デジタル復元版完成記念上映会



映画美学校とアテネ・フランセ文化センターでは、小川プロダクション作品の世界展開を見据え、オリジナルネガよりデジタル復元を行うプロジェクトが進行中である。昨年の『1000年刻みの日時計』に続き、この度、小川プロダクション製作、土本典昭監督作品『パルチザン前史』（1969）のデジタル復元作業が完了したので、これを記念して同作品の上映とシンポジウムを実施することとなった。

**2026年6月6日（土）**

**アテネ・フランセ文化センター（東京・御茶ノ水）**

---

主催 アテネ・フランセ文化センター 映画美学校

## 『パルチザン前史』の持つ映画史的意味は大きい

筒井武文（映画監督）

土本典昭の『パルチザン前史』（69）では、京都大学全共闘の「大学解体」を掲げた闘争が描かれ、ノンセクトの滝田修（本名・竹本信弘）が主人公となる。当時、土本はプロデューサーを務めた黒木和雄の『キューバの恋人』（69）の興行的失敗で苦境に陥っていた。その土本に手を差し伸べたのが小川紳介で、『日本解放戦線・三里塚の夏』（68）の天津幸四郎が撮影を担当し、その後の「水俣」シリーズでコンビを組むことになる。一方、「三里塚」シリーズは、天津の助手だった田村正毅に委ねられる。このカメラマン交代劇によって、70年代の日本ドキュメンタリー史が更新されるわけで、『パルチザン前史』の持つ映画史的意味は大きい。

70年安保の前年は、東大全共闘が占拠した安田講堂が機動隊によって陥落し、その闘争の中心は、京大を中心とした関西に移っていた。タイトル明けは、9月5日に日比谷公園で行われた第一回全国全共闘結成大会の喧騒から始まる。そこに全共闘八派から排除された赤軍派が突入を試みたからである。その前夜の京大内での討議で、経済学部助手の滝田修が登場する。彼は、「共産主義的労働団＝パルチザン五人組」を提唱し、新たな全共闘の解体、再編成を目論んでいた。土本は、滝田の人間の魅力に惹かれ、意気投合する。映画は、10月までの二ヶ月間を、京大内にスタッフ四名で泊まり込む体制で、撮影された。滝田たちノンセクトは、中核派ら主流派と距離を置き、独自の軍事教練を行う。一般学生や報道陣も見守るなかで、五人組で鉄パイプを武器にドラム缶に突っ込むのである。本人たちも自嘲するように、漫画的な光景でもある。驚かされるのは、火炎瓶の作り方が字幕を交えて教示されるシーンである。これは闘争中の全国の同志に伝える実践的な目的もあったのではないかと。

圧巻なのは、京大前の百万遍交差点を学生がバリケードで封鎖した市街戦。通行を遮断された市電の運転手の困惑や野次馬の様子まで、状況が生々しく伝わってくる。ここでの火と水の闘いは凄まじい。学生の投げる火炎瓶が、やがて放水車の放つ水流に敗北していく。小川紳介なら農民の視点から闘争を描くのだが、土本典昭の場合はもっと複眼的で、京都盆地の大ロングから京大時計塔へとズームする客観ショットや、パルチザン同志の滝田批判の言葉まで入るのである。

終盤は、家庭人としての滝田に寄っていく。大学解体を唱えながら、生活の為、予備校で教える矛盾を受験生に語る。自宅で、信奉するローザ・ルクセンブルグについて語り、赤ん坊を抱く。最後は、琵琶湖湖畔の水上ボーリング台で働くパルチザン五人組。

完成後、『パルチザン前史』の上映と講演が各地で開催され、過激派の教祖として、滝田修の人気は全国区になる。しかし、三里塚に銃器を持ち込む目的もあったらしい朝霞自衛官殺人事件の黒幕と疑われ、71年から、およそ4000日の逃亡、潜伏生活を送ることになるとは、そのラスト・シーンの晴やかさからは想像つかないことであっただろう。



2026年6月6日（土）

14:00 『パルチザン前史』 [120分/デジタル復元版]

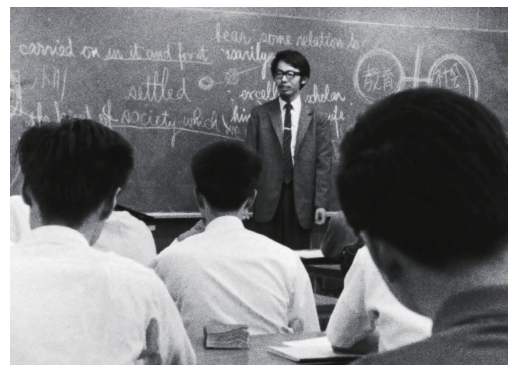
16:10 シンポジウム

筒井武文（映画監督、東京藝術大学名誉教授、映画美学講師）

石坂健治（映画研究者、日本映画大学教授、東京国際映画祭シニア・プログラマー）

司会 加瀬澤亮（映画監督、ドキュメンタリージャパン、座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル実行委員長）

17:30 終了予定



### パルチザン前史

1969年 | 120分 | デジタル復元版 | DCP

製作：小川プロダクション

監督：土本典昭

撮影：天津幸四郎 一之瀬正史

関西全共闘の中心人物であった京大助手の滝田修率いる「パルチザン五人組」の活動に迫り、土本のスタイル上の転機となったダイレクトシネマ的傑作。大学構内で白昼行われる「軍事訓練」や、バリケード封鎖された百万遍交差点での機動隊との市街戦の最中に火炎瓶によって夕闇に燃え上がる車体の描写は今日なお衝撃的である。

### 入場料

一般 1,500円

シニア・学生・障がい者 1,200円

アテネ・フランセ文化センター会員 1,000円

\*当日券のみ/先着順

\*自由席

\*チケットは当日 13:30 から販売します。

### 会場&お問い合わせ

#### アテネ・フランセ文化センター

東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランセ4F

03-3291-4339（月曜 13:00-17:00/火～土曜 13:00-20:00/日曜休館）

<https://athenee.net/culturalcenter/> Email: [infor@athenee.net](mailto:infor@athenee.net)

